

13. 「枕草子」『宮』に始めて参りたるは「第一・第三段落清少納言

前回 第一・第三段落の読み確認、本文、語意をノートに記入

今回 第二段落の、内容確認と現代語訳の完成

☆ 内容確認の解答はノートに書きまわして。

【概要】

時は夜明け前(暁)、作者は帰りの途中だが、中国は引き止める。明るくなる前に自室に戻りたい気持ちが募る。

①暁には②とくく下りなむといそがるる。③葛城の神もしばし。「など仰せらるるを、いかでかは筋かひ御覽せられむとて、なほ伏したれば、御格子も参らず。女官ども参りて、「これ、放たせ給へ。」など言ふを聞きて、女房の放つを、④まな。「と仰せらるれば、⑤笑ひて帰りぬ。

【内容確認の】

1、作者は帰りの途中だが、①暁「から判断せよ。答え方は朝、風、夜。

2、②「は作者の焦る気もだが、なぜ焦るのか。

ヒント・・・第一段落同様、作者はたても馳すかとい気持が。夜勤を希望したことと併せて考え。

3、自室に戻りたいとする作者、「中国が③葛城の神まじりて。「葛城の神とまじりた神か。

ヒント・・・教科書の脚注を参考(著【語】を参考)

4、③「葛城の神」「作者をなぐりえてからかかった言葉だが、共通点は何か。

ヒント・・・③の神の特徴を考え、作者と共通する部分を見つけて。

5、④「まな」とは中宮のせいだったが、これは中宮のどのような気持ちを表していた言葉か。

適当なものを次から選べ。(学習課題帳か)。

ア まだ格子を上げる時刻でもないのに、格子を上げるのをやめて、せつかくの雰囲気
気が壊れてしまつて懸念なまじりた言葉。
イ 格子を上げるのを明るるの、作者が恥ずかしくて顔を出したが、心をよき讀まなむ
た言葉。
ウ 格子を上げるのは新参の者の仕事であるから、作者は上はせむし心遣いなまじりた言葉。

次に続く

